

〔史料紹介〕

関西大学図書館所蔵

「京都上京伊勢屋九郎兵衛文書」(その二)

藤田恒春

47 伊勢屋九郎兵衛書状(折紙)

タテ二七・五
ヨコ二四・七

尚々くわしくハ」返事ニも致申候、「又其元御仕舞」候
ハ、一刻もはやく」御出まち申候、く、以上
ゆふへハ御出なく候

一白糸何程ニつけ申候や

一(黄)き糸何程ニつけ申候哉、「是ハ此方へかい可申候、「白糸も
能く御聞」被成候て御うり尤ニ候

一何にてもやすき」物御うり候ハ、四五百め」斗ニ而かい
申度候(○中 欠) □ □ □ □ うれ不申候ハ、此方へ」取
置可申候哉、何も」談合可申候、まつ」柳やの □ □ □ □ ハ四」

尤ニ候、恐惶謹言

八月六日

□(花押)

〔内封ウハ書〕

〔墨引〕
す、□や
久兵衛様

御中

九郎兵へ

48 伊勢屋二郎左衛門書状(折紙)

タテ二七・二
ヨコ三九・四

〔縮裏内封ウハ書〕

〔墨引〕

いせや
九良兵衛殿

まじる

同
二郎左衛門尉

さかいふ

なく候間、さてく右之通ニ候、「此中ハ爰元一円ニあ
きない之事」なく候、随分く其方あきない事「せいニ
御いれ尤ニ候、「かまへてく夜あそび」なと御たしな
ミ候へく候、御六ヶ敷候共「我等きゆうにて候間、はか
ま・かたきぬ」此ひんきニ御かい候て、御下可給候、「
委細(委細)」いさいわ久兵へ殿へ申わしたし候、「以上

休兵さま御のほり被成候間、一書「申入候、かねも此中持せ
上申たく」候へ共、人遣なく候間、無其儀候、「久兵様ニと
つて参り鎚ニ御」うけ取尤ニ候、就其申来王寺やの「五百めの
銀子さいく入候間、」御才覚候て理平相そへ御」下候て
可給候、はやくかへし」申たく候、又ほうしやのかね八奴
となり」の勝介殿申、御うけ取候て可給候、「宗味公のかね
も其方へ相届候て、」わたし可申と存候へ共、ひんき
(慶長十七年カ)
後十月十四日

追而申入候、立嶋ノかね御才覚候て御下可給申候、「け
にくミなく成不立候、先(利)り分御(ん脱カ)さ用」候て、久兵
殿御下時御下候て可給候

49 伊勢屋二郎左衛門書状 (折紙)

タテニ六・八
ヨコ四二・六

尚く、此方煩少「能御座候間、可」安心候

一大仏才木之衆「爰元にてハ色々取」きた仕、大こく座
衆「なとハのかれ候由ニき」こへ申候、随分くゆ
たんなく御きも「いり可被成候、あわ」才木之事、さ
ん用「大かた済申候由、」めてたく存候、「とかくく
夜はなし」きつと御とまり可有候、「なにとてく」
左様被成候哉、「気ちかいにて候ハんと」ふん
へつ可被成候、「さかなニはま(飯)ち四つ・小鯛」合五
つまいらせ候、「以上

為見舞と与七「御越被成、殊(余長)なら酒過分ニ致」すゝめ、や
かて御煩も「少能御座候間、」可安御心候、我等も「気相能
成次第ニ」罷上、御礼可申入候、就其休兵衛殿「御心さしハ
のひ申候、」道卜公ニ今朝「明日まで定願公の心さし」被
成候、御内儀も五「三日中ニ此方ろ」おくり上せ可申候、「
人御下有間敷候、」其元夜はなし」しけき由、した」
てきこへ」急度御「ふんへつ可有候、」恐く謹言

卯月十日
秀弘 (花押)

(奥内封ウハ書)
「(墨引)
いせや
九郎□衛殿
まいる御報
いせや
二 郎左衛門
ひかいろ

50 伊勢屋二郎左衛門書状(折紙)

タテ二七・六
ヨコ三一・六

(○前 欠)

過分候て□□「うり可申候、以上

まいらせ候

一ほそひは巻ノ六百四十め」まてかい□□なく候

一小判八十六匁五分」これハあかり□□」にて候、あかり

申候」故ハ中国ノ殿たち」江戸へ御こし候とて」其故ニあ

かり申候、「昨日の印子」先々小判ニ御かへ」候ハ、相場

御聞」御うり尤ニ候、「又珍敷乍去」□□□とる可申」□

□□方ハ糸」六百六七十匁」ほとなら者うり」申度候へ共、

かいて」なく候、此方にて」談合いたし」うり可申候、「

又水銀も」少さかり申候、何も」重而可申入候、恐々」謹

言

六月九日

二郎左衛門
秀弘(花押)

いせや
九郎兵衛殿

51 伊勢屋二郎左衛門書状(折紙)

タテ二七・〇
ヨコ四三・二

一筆令申候、仍」糸之相場同事ニ候

一かまほこ

二枚

一同□枚

卅四枚

一及ひ

百五十

一せいこ

数廿

一きすこ

同卅八

一かさの物

七つ

以上

何もさかな御入」候へく候、重而調」のほせ可申候、委」六

右衛門殿へ申渡候、「恐惶謹言

七月廿四日

(内封ウハ書
墨引)

いせや
九良兵衛殿

まいる

同
さかいふ

二郎左衛門

52 伊勢屋二郎左衛門書状(折紙)

タテ二七・三
ヨコ三七・二

猶々、しやかうの」良子り分共ニ」急度御請取候て、「
此ひんきに御越候て」可給候、以上

乍便宜一書」申入候、しやかうの」銀子久兵衛殿」便宜ニ式
百目」請取申候、二ヶ月「のりぶんへ御算用候て、「相残良子
急」度御請取候て」可給候、為其態」一筆申入候、爰元」何

ものさうば(相場)「しれ不申候、葉や」九兵衛殿葉之「銀子も御う
け」とり候て可給候、「恐く謹言いせや」

七月晦日

二郎左衛門
秀弘(花押)

九郎兵衛殿いせや

さかいゝろ

53 伊勢屋二郎左衛門書状(折紙)

タテニ七二・六
ヨコニ三七・六

猶く、白糸少も(相場)のこさす御売可「有候、すわう(蘇芳)」なと
も百目百十匁の「さうば(相場)にて候へとも、「先くほとうりか
い」なく候、此方のかげ」ともより不申候、立かね「お
く候て、かねニつまり」申候間、八月中比ニハ「かけ
共とり可申と存候」候間、手前(行李)一め御下候て「可給候、
けにく成」不申候ハ、六七百めなり「共御下たのミ
候へく候、以上

態与四郎殿上せ「申候、くろふね七月」廿一日の晩ニひらど(平戸)
へ「まいり申候、まき物」糸当年者何の「ふねにもおくく」
参候由候、白糸「御入候ハ、少もく」のこさすかた時も「
はやく御うり可有候、「昨夕も夜とをしニ」糸式参百程」其
元へ上り申候、「其御心得尤候、「権兵様其元ニ」御座候由承

候、「以書状申度候へ共、「御心得候て可給候、「恐く謹言いせや」

七月晦日

二郎左衛門
秀弘(花押)

返く、八月中比にハ「かけ共取可申候間、「先銀子巻貫
目」ほと御下候て可給候、「頼而く帰し申可候、「其元
ニ而し(蘇香)やかうの良」九右様の茶のかね「九兵へ殿の茶
の良も急」度御取候て、其方ニ御をき「可被成候、かし
く

九良兵衛殿いせや

さかいゝろ

54 伊勢屋二郎左衛門書状(折紙)

タテニ三一・九
ヨコニ四六・七

尚く、葉共「藏ニ御をき候て」可給候、与四郎「始而上
り申候間、「万御心付候て、「むさとしたる所へ」あるか
さるやうニ」万事前後ノ」いつ(異見)つけん急度「被仰候て可給
候、「其元ニ与左衛門(○中 欠)」「□」与四郎と「御
つれさし候て」かねなども取候様ニ「頼申候、つられ
んし(連)やく」御かし候て、せうて(背負)「あるき候て申付候間、「
さもなく候ハ、「急度いつけん候て」可給候、以上
葉持せ与四郎」上せ申候、其方ノ「藏ニ此二つノひつ(櫃)」御

をき候て可給候、「小間物にて候間、「蔵よりそとニハ」御
をきあるましく候、「すいふん薬少」成共、銀ニ成申様ニ」
御才(寛)□□□□、(可然カ)□□□□候

「先度より如申候」銀子疋貫刃成共「式貫刃成共御」才覚候
て、休兵へ殿ニ「御下候て可給候、「爰元一円あき」ない
事なく候て」めいわく申候、恐々「かしく

八月六日

いせや
二郎左衛門

秀弘 (花押)

(内封ウハ書)

いせや

九郎兵衛殿

まじる

同 さかいの
二郎左衛門

55 伊勢屋二郎左衛門書状 (折紙)

タテ三二・九
ヨコ四三・九

(○前 欠)

談合申度事御入候、「又其元すき候て、いとや(糸屋)」三郎右衛
門殿へすわうの「礼ニ御出候へく候、「我等も一兩日以
前ニ」礼ニ参候、事外」地(馳走)そうにて候ま々「よくく礼
御申」候へく候、「以上

御状拜見申候、其元へ「御くたりの由、少々」此方へ御出
候へく候、「我等も態成共」可罷上と内々存候」処ニ、よき
時分」御くたりニも懸御目」談合申度事御」入候間、必々

御越」候へく候、めうしやうさま」わつらいおこり候て、「
しかともなく候ま々」よき次而にて候間、「御見廻あるへ
く候、「又今日ハ道天様」御こし被成候処ニ、「色々御立よ
り被成」候へと申候へ共、御出も」なく御残多存候、「御
あひ候て御心へ可」被成候

「たはこの事、早々」よきたはこもなく候、「よきかい物にて
ハ候へ共、「一ヶ月や二ヶ月」にてハあかり申ましく候、「
一めハあかり候ハんかと」存候、其御分別候て「可然候、
何も久兵と」談合申候てかい可申候、「くハしく返事ニ可」
承候、恐惶謹言

八月廿三日

同二郎左衛門

秀弘 (花押)

(内封ウハ書)

(○ウハ書欠)

堺の

56 伊勢屋二郎左衛門書状 (折紙)

タテ二七・二
ヨコ三九・四

尚々、薬種」良子之事、九郎兵へ」手前ノ事ハ先」□□
□□ニも被成、「此方へ」きさまる」□□刃かへと」お
ほしめし」御くたし候て」可被下候、「頼存候、「村九右(村上)
様へ」被出被成候て」よきやうニ」御取成頼申候

先度ハ御下被成」候へ共、何事不申」御残多存候、「又先度

之(敬)さめ之(伊勢屋)「良子九郎兵、ぬしかたへ被相」濟候、就其「彼
藥種之良子」九郎兵ニ御さん「用被成候や、」左も無御座
候ハ、此者ニ急度「御くたし候て」可被下候、頼入候、
何も於爰元「御用も可被仰候、」躰ニ〇〇〇〇〇〇「万々可得
御意候、」恐惶謹言

九月三日

いせや二郎左衛門

秀弘(花押)

熊彦右様

参

さかいふ

57 伊勢屋二郎左衛門書状(折紙)

タテニ七・三
ヨコニ八・三

尚々、孫右殿(龍)「のりうなふ(片)へん(龍)なふ」のやきかへし
と「申物にて候間、」一斤か銀五十匁程「仕物にて候、
其御心得」可給候、殘藥共「御下候て可給、」よきつれ
お御尋候て「此与四郎御下候て」可給候、かねの儀、
かならず御下候て可給候、以上
先度御下候へ共、「何事不申候、仍」与四郎上せ申候、か
け「共御あつめさせ候て」いそぎ御下候て「可給候、
又立嶋の」五百めのかね理平共「御下候て可給候、」先度
のさん用の通の「かねも此与四郎ニ御」下候て可給候、其
元(算)「勝介殿ニ〇つけ〇〇〇〇」(〇中欠)「座候〇〇〇〇」

〇つけいにて候ハ、「たうめにて五匁五分つゝ」にて候
ハ、有次第(龍)「御かい候て可給候
一其元孫右殿りうなふ(算)」山口や二郎兵へ殿ニ御「座候お見申
候へハ、」りうなふの(算)にせにて「候ま、かい不申候、か
まへへ」りうなふなく候、やすく「候共、御かい有間敷
候、」恐々謹言

九月三日

同二郎左衛門

秀弘(花押)

いせや
九郎兵へ殿

まいる人々御中

塚

58 伊勢弥兵衛書状(折紙)

タテニ七・二
ヨコニ三六・九

返々、弥市との「ときもわ(煩)」つらいもいたし不申候
へハ、「御ころやすく」おほしめし候、「その方様たつ
ね」申事も御入なく候、以上
爰元弥市事、(大久保長安カ)「との様へ御れい」にいたし申候へハ、「一たん
の御ねん」ころに候間、「御ころやすかる」へく候、宗徳(田中)
様へ「一兩日之内ニ御」いを得、御出判「申うけ罷越」可申
候、こゝもと「の仕合一たんよく候」間、かへす御心
やすかるへく候、其「もと御よろこひの儀、いよくめ」て

たく存候、くわししくくら参候「間可申候、めてたく」かし

卯月廿三日

いせ
弥兵へ
守（花押）

〔内封ウハ書〕
〔墨引〕

弥市

御□□様

参□□

いせ
さどろ
弥兵へ

59 龜齋書状

タテ二四・九
ヨコ四一・九

尚く、久兵衛殿御用候□□「かいはりんすもんハよき」
お一たん御かい□□□□よく「申され候、からくさハ」
たゝもいやにて候、以上

此間ハ不懸御目候、「はや銀子も御取候哉、「いつ比御下にて候、ちと」〳〵御両所御同道候て」成、御出奉待存候、「めういも御言伝申入」まゐり申候、恐惶謹言

〔墨引〕
〔慶長十七年九〕
壬十月廿六日

〔内封ウハ書〕

〔墨引〕
久兵衛殿
甚太郎殿

御両所人御中

龜齋

〆

60 龜齋書状

タテ二六・三
ヨコ三九・四

此くすり一両日まゐり候て「のちハ一日よミ候てきかせ申、「くすり兩人ながら」ふだんまゐり候ハ、よく」
御入候へく候、かしく

御きりかミ給候、くすり「あわせ候て、たゝいままゐり候、「まつ〳〵一ふくハ御せんし候て、「まいらせらるへく候、もし〳〵」はなちたり候ハ、一ふくの「くすり此方へ可給候、かげん」なおしまいらせ候へく候、たゝいまも「まゐりみやくおとり候て、くすり」まいらすへく候へも、ちと〳〵「ひまゐり申候あひた、そのきなく候、「めてたくかしく」又くすりなへ・てんもく・ふくろまゐり候、ほろみそ一ちう候へく候、又一ちうハ「かいはり御やり候て可被下候、かしく

〔内封ウハ書〕

〔墨引〕
お

もしさま
御返事

お

61 龜齋書状

タテ二五・四
ヨコ三五・七

(端裏内封ウハ書)

兵衛様
人々御中

亀齋

尚々、三条^ハ何共不申来候哉、「承度候、明日ハ」
まかりあかり可申候、「以上

今日ハ御いそかわしく「御座候ハんニ、三〇やうい申」祝着
仕候、大ふつ^(ハ)のすみ「まわし申、三百十二俵ハ」式斗四升ま
わし、二百廿俵ハ」式斗五升まわしにて御入候、「今日のハ
能まわり申候、将亦」銀子ハおそく成候ハん様ニ承候、「き
つてハ二三日中之内ニ取ニ」まいれのよし被申、何も」以参
可申上候、恐惶謹言

(〇後 欠)

62 雀屋久兵衛書状 (折紙)

タテ三四・五
ヨコ四一・〇

(〇前 欠)
はつニ御あわせ候て「可被下候、」くわしく不申候、以
上

態人^をのほせ候ハんと「存候折ふし、よき便」有之候間、一
書申入候、「先度小西橋右衛門殿ニ」文進之候、相届」申候
や、然者白糸之」銀子之事、今日ニも」くたり候ハんかと存

候へ共、于今「〇〇候、われら出舟も」六日ニ遣し候ハんと
申候へ共、「七日か八日ニハ必々出申」ふん有之候、左様ニ
候へハ」銀子おそくくたり候とて「定有われら如在ノ」やう
ニ申され候、右之通ニ「二郎左衛門殿へも談合申て」見申候
へ共、二郎左衛門殿江も「〇〇ねんきれ申候、」こゝもとに
ての才覚も」なり不申候間、何とぞ」被成候て六日か七日ニ
ハ必々」御くたり頼上申候、為其」一書申上候、何共々」
又九郎も其方ノ御前も」せうしニ存候へ共、不及」是非候、
出舟之はつニ」御あわせて可被下候、「又九郎くたりもおもひ
の」ほかはやく御入候、何様」やかて々」罷上万々」可得御
意候、恐惶」謹言

五月三日

すゝめや久兵衛

(花押)

いせや九郎兵様

(内封ウハ書)
(墨引)

(〇ウハ書欠)

堺^ガ

63 雀屋久兵衛・伊勢屋二郎左衛門連署書状

(折紙)

タテ二七・四
ヨコ三三・八

(○前欠)

上申候、以上

御状拜見申候、然ハ「黄糸の事、早々」又三郎殿御存知の「
とく昨日色々」情入候て尋候へ共、「其元る一両日之内ニ」□
□くたり候て「あかり申、七百卅め」□五十めのさうは「
て候間、其ほと」ニハたかく御入候者「かい不申、其御心へ」
あるへく候、又長子「若ノ四百五十め此方ニ」おき申□□□
うけ取仕候て「又三郎殿ニ渡し申候」其御心へあるへく候、「
たはこ成共又ハ」糸成共せい入」候て、かい可□候、「重而
用之儀」候ハ、可承候、「恐惶謹言

九月四日

いせや
二郎左(花押)
すすめや
久兵(花押)

(○宛名欠)

64 雀屋久兵衛書状(折紙)

タテ三〇・七
ヨコ四三・二

なをく、そめ物御「くろうなからよき」やうニ御そめ
たのミ」申候、以上

(便宜)
ひんきながら一ふて「申まいらせ候、われらも」なかさき
(返留)
ニたうりう」申、此二三日以前ニ」のほり申候、そこもと「
ミななくさま何事」なきよしめてたく」おもひまいらせ

候、「こゝもとミなくも」なに事なく御入候、「御こゝろ
やすく□」そのはうの御事」はかりきつかい申候に、「ま

つゝ」なに事なく候て、「一しほ御うれしく」おもひ申候、
(伊勢屋)
九郎兵へ殿」御こゝろへ候てたまわり」候へく候、
さま・「めういさまへも御こゝろへ」たのミ申候

(榮糸)
一せんし半ひき此」甚二郎殿ニのほせ」申候、御うけ取候て「
たまわり候へく候、「すなわちもん」□□まつりすいふん」
御くろうなから「いそぎく御そめ候て」たまわり候へく

候、「良九奴まいらせ候、」たり申さす候ハ、かき」ねて
のほせ可申候、「くわしく申候、すいふん」なにもせいを
御入候へく候、「かしく

十一月十六日

すすめや
久兵へ

(伊勢屋九郎兵衛書)
おいぬさま
まいる

65 雀屋定有書状(折紙)

タテ二九・二
ヨコ四二・〇

尚々、黄糸六丸」のほせ申候、もはや」こゝもとニなく」
其御心得」可被成候、以上

黄糸之儀承候而、「則二丸かい候て」のほせ申候
黄糸二丸老貫四百匁」又十匁かうせん出し」合一ノ四百拾匁」
其方分の銀一ノ五百」五拾匁、歹百卅七匁もとし申候、三匁

ハ」其方分かるく参候、「はや爰元黄糸」七百廿奴卅奴ニて候、「これハほり出し候へく候、もはや」^〇へも爰元ニなく候、「さりなから歹の」利御入候ハ、御うり」あるへく候、明日」なにも長崎」のほり候ハ、また」さかり可申候、久兵も」銀子請取候ハ、下」候へと、御申候て可被下候、恐惶謹言

八月八日

すゝめや

定有 圓

九郎兵衛殿

参

66 宗甫書状

タテ三二・二
ヨコ四四・〇

〔端裏内封ウハ番〕
(墨引)

亀齋様

まじる

宗甫

以上

先度彼語ニ御出なく候、「御わつらい被成候哉、無御心」元存候、明日昼ちとく」御出可被成候、又糸一ノ百十八奴ニ」して御壳候間、其□御」心得可被成候、万々貴面ニ」明日可申入候、恐惶謹言

霜 九日

宗甫(花押)

67 大郎衛門尉書状

タテ三三・八
ヨコ二七・三

以上

内の人のかたへ御文くハしく」なかめ入まいらせ候、こめかい候て」まいらせ候

一 ことしハ拾奴ニ 六斗三合まいらせ

一 ひねハ 廿奴 壱石壱斗参候

(炭)

なにも御用の事可承候、又」すも」ちんたかく候てのほ

せ」申さす候、かちにもちの人に」なりとも、まつ一クの

ほせ可申候、「いそき候まゝくハしく□あと」可申入候、

かしく

〔内封ウハ番〕

(墨引) いせや御もしさま

まじる

大郎衛門尉

68 長衛門書状

タテ二八・三
ヨコ四二・三

〔端裏内封ウハ番〕

(墨引) 九郎兵様

人御中

長衛門

〆

〆

猶々、我等義も申度候へ共、「たゞいま振舞ニ参候故」
不能其儀候、何様「面上剋と申上候」

(蘇芳)すわふ之儀、昨日如御報「申候へハ、十匁ニ付五貫目」御ま
け被成申□□かと申候、「いかゝ候はん哉、成申候者、其」
通ニ被成可被下候、就中「先度之茶代宇治へ渡」申候処、た
ゞいま此銀「あしき由申来候間、御つ」りかへ候て可被下候、
我等□□とくニ判仕候て渡シ直申候「間、銀ノちかいハ少も
御座有」間敷候、又此中申候、残る「三百目之儀も豊州様」
御上落なきうちニ渡し「申度候、是又御つゐてニ奉頼候

(○後 欠)

69 長政書状

タテ二九・三
ヨコ四二・八

(端裏内封ウハ書)
「(墨引) □□ □□

源衛門
る

尚々、ちいさ刀卷ツ又鮭卷ツ「慥ニうけ取被成候、以上
早々御帰御浦山敷存候、「殊ニ留主ニハ預御使候由忝候、「
拙者も夜前罷歸申候、早々」可申上候処、草臥申候故無其
儀候、「何様い細可申承候、又々」ちいさ刀返進申、慥ニ
御請取」候て、御礼被仰御返し候て」可被下候、又々大所

人衆より「貴様へ鮭卷ツ参候間、慥ニ相」届申、且又御う
け取可被成候

一糸之儀、御売候や、未御ミせなく「候や、様子承度と時分」
先々払申可然と存申候、「何分ニも御談合可仕候、恐惶謹言
十月十三日
長政(花押)

70 某書状

タテ二七・九
ヨコ三二・一

(端裏内封ウハ書)
「(墨引) □□ □□

九郎兵様

人々御中

先ニ白糸卷丸渡申候、慥ニ「御請取可給候、それニ付といや」
只今人遣候へハ、くわん書ニ「たかく申候に、其御心得候へ
く候、「たう□□□□卅目申候、其」御心得へく候、此分
候ハ、「夕ハさかいる人ものほり」可申候、くれく御うり
申まし

(○後 欠)

71 与三右衛門書状(折紙)

タテ二七・四
ヨコ四二・一

(○前 欠)

「文おそくまいり」候て、きつかい申候へ共、「

まつくまいり候て、「そのはうさまニも」御よろこひにて候ハんと「おしはかり」まいらせ候、「此ほとのみつかい」申事御すいれう(推)「なされ候、四郎さへもんとのおかたる」御事つてなされ候、「さう二郎も」何事も御さなく候」と申候て、たうくわんさま(長)も御申候て「ひまいら申候(節)

なかさきる」文まいり」候まゝ、わさと」もたせ候て」のはせ申候、御きつかい」なされ候ハんに「ますくまいり」候て、御うれしく「いそぎのひんき(便宜)」にて御さ候と申候」にてめいくニ」まいり申候、「ますく此よし」九もしさまへ御」こゝろへたのミ」いりまいらせ候

(内封ウハ書)

「いせや」
与三へもん
」

72 某書状(折紙)

タテ二七・五
ヨコ三二・〇

尚く、新右殿御下」候へとも、正月比より」相煩候て、終不懸御目」御無心とも申候、御礼」被仰て可給候、「了意之事、其方へ」御出候て、一しほ(入)「おほめし出し」候ハんと存候事候、「目出度夏中ニ」のほり申

(〇後 欠)

其以来不申通候、「御床敷候、去年」御上り之後、終随」幸便無之、無念存候、「爰元之御座候刻」別而寺へ御馳走」忝かたく候、今ハ申」出候斗にて候、寔」御上之時分船場(〇中欠)「ちからおとし申候、「夏中ニはやく」能州まで渡海」仕候事候、何事も」今生ハ如此候、一大事ハ」後生にて候、無御」油断御嗜尤候、恐々」謹言

三月十八日

□(花押)

(内封ウハ書)

(墨引)

長井九郎兵衛殿

まじる

佐渡

照

73 某書状

タテ二五・六
ヨコ三四・八

(端裏封ウハ書)

」

(〇前 欠)

はかきの□」度候間、出□」入申候、かしく

昨日者参会祝着仕候、「然者黄糸御壳被成候者、一丸」買申度候、会所へ遣し候者頼」申候、又前之黄糸のはかき」未貴様ニ御座はん八間、さし」引仕、はかきやふり申度候、御透ニ」頼申候、白糸も御壳被成御座候者、「七右殿ニ三人シテ買申

度候、「又御透候者、少しやうぎをそへ可申候、」恐惶謹言

十月十八日

(○後 欠)

74 某書状

タテ二八・六九
ヨコ三五・六九

以上

先程者御上候ハ、御使下し候間、「左様かと存候、此方ニ御逗留之由、」状を事伝可申候、後程もたせ可進候」
ほと、晩なと此方御立出可被成候

一まくら・そろはん助市(目末)ニたつね候へハ、「道印わけふん之道具にて、右二色ハ」(山田)るすんへ御渡候、久右衛門手前へ」

参候の□□成不申候、此由宗味様「被仰可被下候、今日者宗味様へも」此方人をも不進候、ほとく御透候ハ、御同道候て待申候、恐惶謹言

霜 廿一日

(○後 欠)

75 某書状

タテ二九・一
ヨコ二二・一

猶く、白糸之儀、少やすく候共「御うり可被成候や、く(過)

わふん(分)ニ目うり」存候ゆへ如此候、」以上

一書申入候、然者白糸之儀、種々「見せ申候へ共、はきくとかい不申候、少」やすく申候、乍去今朝壹丸壹貫「百五匁ニ売申候、残りハ九十五匁百目」よりたかく仕申ましく候、恐惶謹言

霜月廿七日

(○後 欠)

76 某書状

タテ二五・一
ヨコ三三・九

以上

今朝者致伺候、糸御まけ「過分ニ存候、乍去糸先我等ハ」取不申候、重而又買可申候、然者「今朝如申候、銀子御かし候て可」被下候哉、一昨日日記進上申候、「銀成申間敷候哉、御返事ニ」承度候、銀二ノめ斗今日「余所へ渡申候、銀子たり不申候故、」さてく申度候、申入さてく「御はつかしく候、恐惶かしく

廿六日

77 某書状(折紙)

夕子三二・九
ヨコ三八・〇

(○前 欠)

貴様ハ五月茂罷成、てんひん」御取候由、それハ一段」
わかま」成由、御こと」わり申度ため人を」こし申候へ
ハ、ふせうなる」ものと思、我々方へハ」御越なく村九
(不精) (村上)
右さまへ」御さ被成、さうい之事」御ねい人にて候、は
かり改ハ」其通地子被下候、次右・九右・」作右西三人
衆之」仰事ニ候、いづれも御法度と存、」少もむりなる
事」ねはる事ハ御□」覚悟ニなく候処ニ、」一段き
こへ不申、仰事」候ハ、」旦那様此方ニ御座候」時可被
仰候、以上

(○前 欠)

かまいなく候て」村上九右衛門尉殿へ御」越、京後藤判之ふ
(分) (天) (利)
ん」とう無用之由、我々」只今之極印てんひん」を以、売買
(脱カ)
候得由申候」由、九右様へ御さういニ」事一段めいわく仕
候、」我々ハ佐渡中部入」之両替衆改候共、後」藤判ハ書立
其ハ」売買させ、判之ふん」とうももたさる者斗」改、我々
てんひん相渡」候得と申付候、少も小」者共ねはり申候由、
九右」御披露可被成候由、御城」る罷越さふく改、」使之者共
(所) (懸)
せつかん申候へ共」不存知候由候、近比」無曲候、為其申入

候、委ハ」追而書ニ可有御座候、恐々」かしく

(○後 欠)

本号の編集委員

小山	仁	示	教授	平	雅	行	助教
芝井	敬	司	助教	明尾	圭	造	(M2)
江角	和	生	(M2)	新藏	正	道	(M2)
繁田	元		(M2)	森	岳	郎	(M2)
竹内	素	子	(M2)	狩野	直	敏	(M1)
小野田	一	幸	(M1)	木村	能	幸	(M1)
田口	泰	久	(M1)	宮前	千	雅	(M1)
福繁	綾	子	(M1)	中島	敏	博	(M1)
斎藤	満		(M1)	吉田	千	絵	(学3)
乾	千	嘉	子	加	納	妙	子
田中	義	之	(学3)	上	野	進	(学2)
廣橋	雅	則	(学2)	土	屋	信	亮
溝尾	秀	和	(学2)	広	岡	孝	信
塚田	泰	二	(学2)	粟	岡	美	保
矢嶋	巖		(学2)	長	川	博	紀